

「地図感覚」から都市を読み解く

空想地図作家

今和泉隆行
いまいずみ たかゆき

空想地図を描くなかで体得したもの

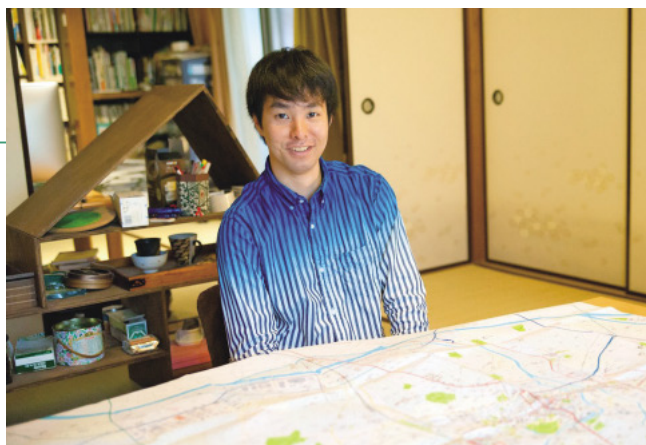
幼少期は無鉄砲にトライアンドエラーを繰り返すうちに、何かを体感的に身に付けていく。それに対して、大人になってからの学びは、理論や事例をインプットして理解していく。例えば、花屋の取引について、幼少期はお花屋さんごっこをしながら体得するが、大人は「花と金銭を店員と客が交換する事象」というように納得しようとする。

前置きが長くなってしまったが、私は7歳のころから地図をつくっている。地図といっても、実在する日本のどこかの地図ではなく、実在しない空想都市の地図だ。空想というとファンタジックに聞こえるが、全くファンタジー性のない、特に見どころもない普通の都市の地図である。幼少期の私は、絵本やゲームよりも地図を身近に感じ、よく見ていた。絵本や小説ではなく、地図を見て、まだ行ったことのないどこかの様子を想像するのが楽しみだった。地図を見た後に実際に行って確かめることで、よりこの感覚は磨かれていく。こうした感覚や能力は言

語化されず、語られることもない。たいして意識せずにこの感覚を体得する場合が多いため、これを1つの能力だと思ってもいけない。私はこの感覚を「地図感覚」と名付け、『「地図感覚」から都市を読み解く』という本を書くに至った。かくいう私もこの地図感覚を無意識に身に付けたのだが、それを明らかにするために、この感覚を相対化、客観視して説くことに努めた。

地図から歴史、風景、地形を読み解く

地図上に描かれた道路の模様を見ただけでも、かなりのことが見えてくる。幹線道路に沿って少し曲がった細い道があり、沿道に寺社や個人商店が集中している。その道はその幹線道路の旧道であることが多い。地方都市で、地銀や信金、個人病院、寺社が集中するところがある



時の調べ
Essay

ば、そこは古くからの中心地であることが多い。縦横無尽に道路網が広がる密集した住宅地でも、ところどころ道路と道路の間隔が空いていたり、行き止まりの道が過剰にあったりすると、等高線を見なくても、そこに傾斜や崖があり、起伏があるであろうことも読み解ける。単なる道路の模様を見ただけで、その歴史や風景、地形の特徴なども読み解けるようになるのだ。

違和感を覚えるかどうか

今回、執筆にあたって空想地図を1つつくった。



地図感覚が試される空想地図

地図感覚がない人には、何の変哲もない地図に見えるが、地図感覚があると違和感を覚える地図なのだ。ここで問われるのは、主要施設や集合住宅の大きさ、距離感などだ。小中学校やモール、ドーム、アパートやマンションの面積、駅の大きさや駅間距離を比べてみると、実際のものとはかなり異なる。こうした建物の大きさを気にしなければ、特に疑問も違和感もないのだが、いったん気になると気持ち悪く感じるだろう。この地図では建物の大きさや距離感に着目したが、地図に描かれるのはそれだけではない。

地図が表現手段であり画法であるならば、形のない空気感や言葉にならない何かを伝えたり、読み解いたりすることもできるだろう。そのあたりは、まだ十分に言語化できていない。これを言語化していくこと、新たな地図表現の可能性を探ることは、これから試行錯誤していききたいことでもある。

略歴

7歳のころから空想地図を描く。大学時代に47都道府県300都市を回って全国の土地勘を付ける。IT企業勤務を経て、2015年に地理人研究所を設立。地図を通じた人の営みを読み解き、新たな都市の見方、伝え方を実践している。情報デザイナー、記事執筆、社員研修、地図会社アドバイザー、テレビドラマの地理監修・地図制作に携わる。著書に『みんなの空想地図』（白水社）、『地図感覚』から都市を読み解く―新しい地図の読み方』（晶文社）など。

